

地域防災教育活動の継続性に関する研究～防災トランプのプレイリーダー認定制度を事例として～

Continuity of the activity of regional education for disaster prevention: A case study of certificate system of the play leader by using Bousai-trump

福本 塁
FUKUMOTO Rui

岡 歩美
OKA Ayumi

キーワード：防災、対話、地域教育、継続性、防災トランプ、プレイリーダー

Keywords : disaster prevention, dialog, regional education, continuity, instructor, educator, Bousai-trump

What are the factors important for continuity of the activity of regional education in disaster prevention?

In this paper, we identified the hypotheses of the factors through the introducing a case study of certificate system of the play leader as instructor and educator by using Bousai-trump.

1. はじめに

防災教育分野における研究は「実践の報告」や「方法論の開発」といった事例に関する報告が多く¹⁾、実践内容が優れていたとしても、それらが継続的な取り組みにつながらず短期的な試行に留まる事例が少なくない。近年、様々な分野で市民による自発的な取り組みが展開されている。これらの取り組みの継続性を確保するための要因としては、活動資金、運営体制、参加者の満足度、関係者の動機付け、活動や成果の情報発信等、多岐に渡る。防災教育分野においては、これらの諸要因のうち、場づくりを含む実践の直接的な担い手は必要不可欠である。しかし、直接的な担い手の候補者がどのようなきっかけで出現し、興味を持ち、どのようなプロセスを経て担い手となり、継続的な取り組みに至るのかは研究蓄積が不十分であると考えられる。

そこで本研究は申請者らが開発し²⁾、実践が全国的に拡がり現在も継続している「防災トランプ」を活用した場づくり^{3), 4)}を事例に、場づくりの担い手を認証する制度である「防災トランププレイリーダー制度」に焦点を当て、

その継続的な実践方法の実態を詳細に整理した上で地域防災教育活動の継続性に及ぼす影響を整理し示唆される諸要因を考察することを目的とする。得られた知見は、各地域に根ざして活動する団体が地域防災教育の実践に取り組む上で有用な点で意義がある。

表1 インタビュー調査概要

実施期間	2014年8月から2019年8月
調査対象	認定研修を受講したプレイリーダー(239名)
実施方法	半構造化インタビュー調査
主な質問内容	認定研修の受講動機(239名) 受講後にどのように活かしたのかに関する実際の活用事例(11名)

2. 研究方法

2-1. 研究対象

防災エデュケーション協会(神奈川県わかものシンクタンク内に設置)⁵⁾が認定している「防災トランププレイリーダー」(以下、プレイリーダー)およびその認定制度(以下、認定制度)を研究対象とする。

「防災トランプ」は、トランプ遊びを対話の進行軸とし、トランプの順番に沿って話し手と聞き手が交互に入れ替わり、防災を主題とする題目について参加者の考えや体験を共有する場づくりが可能な教育教材である。

プレイリーダーは、防災トランプを用いて「世代をこえて防災について楽しく話し合う場づくり」の実践方法を学ぶ研修(以下、認定研修)を受講しており、受講者の地域や所属団体等で上記場づくりが可能な個人を指す。

筆者らは上記認定研修のカリキュラムを立案し、2013年9月～2019年8月までに開催された全ての認定研修における講師を務め、受講後の相談対応やプレイリーダーの実践支援を実施する運営者の立場として関わった。

2-2. 認定研修の実態調査

神奈川県わかものシンクタンクが管理している記録資料を基に、認定研修の実態として、プレイリーダーの登録者数の推移、登録時点における年齢、活動地域、職業・所属等の基本情報を概観する。さらに、開催方式、人員体制、認知方法、手続きと費用、拠点形成、プレイリーダーの支援体制、プレイリーダーの実践機会の創出の視点から認定研修の運営体制の実態を詳細に記述する。

次に、認定研修で使用している配布資料及び認定研修の実施状況を記録した映像資料を基に認定研修の実施内容について実態を記述する。

2-3. プレイリーダーに対するインタビュー調査

プレイリーダーを対象に、表1に示した質問内容に基づきインタビュー調査を実施した。

3. 結果

3-1. 認定研修の実態調査結果

認定研修の実態として、受講者であるプレイリーダーの属性情報、認定研修の運営体制、実施内容について概観する。

3-1-1. プレイリーダーの属性情報

(1) プレイリーダーの登録者数の推移

2013年9月から2019年8月までの期間において、認定されたプレイリーダーの登録者数の推移を図1に示す。2013年当初は開発者1名にプレイリーダー3名の計4名体制で運営を行っており、各地域において実践されたワークショップの定着を狙いとし、本認定研修の運営が本格化した。2014年、2015年と隔月で数名～十名の規模で認定研修を開催し、登録者数が100名を越えた。2016年には、防災トランプを活用した場づくりが社会的評価を受けたことに起因し登録者数が大きく増加した。登録者数が300名を越えた段階で、当初の目的である「各地域におけるワークショップ実践後の定着」のフォロー体制を再整備するため、2017年は一時的に認定研修の開催を休止、2018年より再開し、2019年9月時点で362名の登録者数となっている。

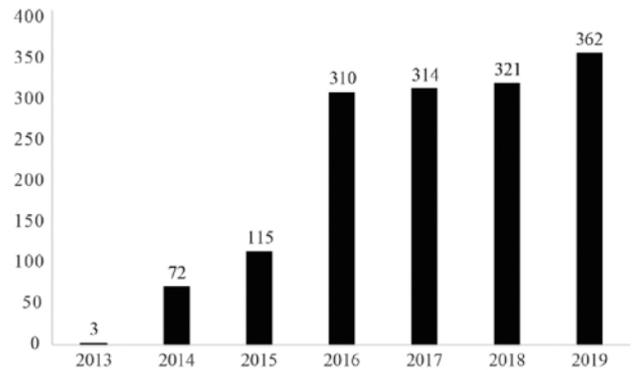


図1 プレイリーダーの登録者数の推移 (人)

(2) プレイリーダーの年齢

プレイリーダー登録時点における年齢別登録者数を図2に示す。30代が最も多く(113名 32.1%)、20代(75名 21.3%)、50代(63名 17.9%)も多い結果となっている。40代(49名 13.9%)は50代より少なく、60代(33名 9.4%)、70代(17名 4.8%)は比較的少ない結果となっている。10代(2名 0.6%)が最も少ない結果となっているが、別途、中学3年生までを対象にした「キッズ・ジュニアプレイリーダー制度」の認定制度を運用しており、上記制度は「場づくり」ではなく、「自身の意見を話し、相手の意見を聞くこと」に主眼を置いた認定研修となっているため、キッズ・ジュニアプレイリーダーは本研究の調査対象には含めていない。

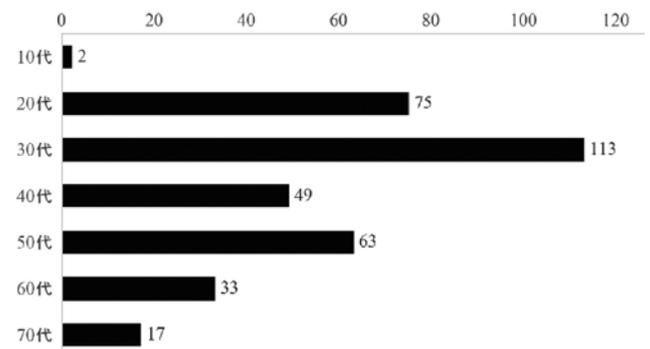


図2 年齢別プレイリーダーの登録者数 (人)

(3) プレイリーダーの活動地域

プレイリーダー登録時点における活動地域別の登録者数のうち上位10地域を図3に示す。認定研修を主催している神奈川わかものシンクタンクの活動拠点が位置する神奈川県(117名 38.7%)が最も多く、次に消防署や社会福祉協議会と認定研修を共同開催した実績を有する福岡県(56名 18.5%)、群馬県(53名 17.5%)が多い結果となっている。さらに、東京都(24名 7.9%)、千葉県(19名 6.3%)、埼玉県(17名 5.6%)と関東圏が多くなっており、東日本大震災、新潟県中越地震、阪神淡路大震災等で被害が大きかった宮城県(16名 5.3%)、新潟県(14名 4.6%)、兵庫県(11名 3.6%)が多い結果となっている。

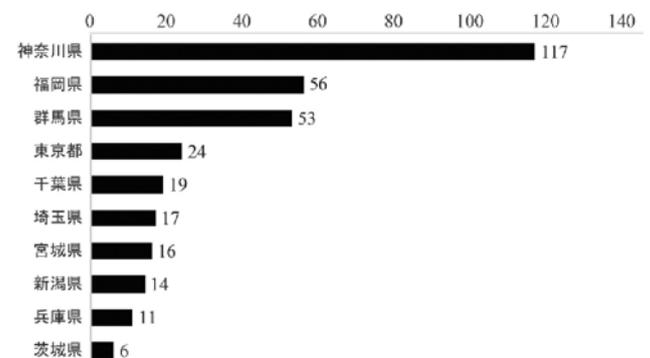


図3 活動地域別プレイリーダーの登録者数 (人)

(4) プレイリーダーの職業・所属

プレイリーダー登録時点における登録者の職業・所属のうち上位15件を図4に示す。最も多かったのは教員(83名 27.5%)であった。特に小学校・中学校の教員が大半を占めており、高校教員、大学教員は少数であった。次に、町内会(自治会)・防災担当(63名 20.9%)が多い結果となった(会社員・アルバイトも含む)。この中には自主防災組織の防災担当も含まれる。続いて、自治体職員(29名 9.6%)、経営者(飲食除く)(28名 9.3%)、NPO・地域団体(25名 8.3%) (会社員・アルバイトも含む)、学生(学部生)(20名 6.6%)、経営者(飲食店)(19名 6.3%)、社会福祉協議会(16名 5.3%)、

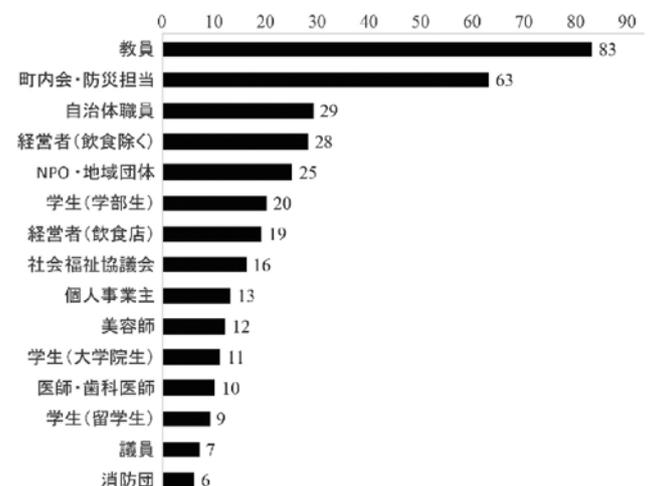


図4 職業・所属別プレイリーダーの登録者数 (人)

個人事業主(13名 4.3%)、美容師(12名 4.0%)、学生(大学院生)(11名 3.6%)、医師・歯科医師(10名 3.3%)、学生(留学生)(9名 3.0%)、議員(7名 2.0%)、消防団(6名 2.3%)の順となっていた。



図5 認定研修の認知に用いたパンフレット

3-1-2. 認定研修の運営体制

(1) 認定研修の開催方式

認定研修の開催方式は主に拠点型と出張型の2方式に分かれる。拠点型は2ヶ月に1度、第二日曜日の午後に関所の場所で定期開催する方式である。この方式では、一度に受け入れる定員を10名程度とし、各受講者の希望する活動に沿った実践内容を組み立て、研修を実施した。同日午前には同一の場所でワークショップを定期開催していた。

出張型は、研修を企画する機関より依頼を受け、講義と実技講習として位置づけられた認定研修を組み合わせ、約8時間程度の長時間に渡り開催され、参加人数を多く受け入れることが可能な方式である。

(2) 認定研修の人員体制

認定研修における人員体制は、講師、実践補助スタッフ(プレイリーダー)、会場スタッフの役割で運営がなされていた。拠点型の場合は、講師1名、実践補助スタッフ1名で対応し、出張型の場合は、受講者数に応じて実践補助スタッフを増員した。

(3) 認定研修の認知方法

認定研修の認知方法として、図5に示すパンフレット(A4表裏)を地域活動拠点となり得るカフェ・コワーキングスペース・公共PRスペース等の場所に数部ずつ設置した。防災トランプ公式WEBサイトには認定研修の概要を記述し、専用申し込みフォームを設置した。有料の広告掲載を利用した宣伝行為は実施しておらず、ワークショップ参加者に上記パンフレットを配布し、趣旨の説明を行った。

(4) 認定研修の手続きと費用

認定研修に必要な手続きは図5右部(印刷時は裏面)に示す、申込書を記入し、電話、FAX、e-mail、専用フォームのうち、何れかの方法で申込みを受け付けた。費用は原則4,000円を受講者の負担とし、学生、主婦、定期収入のない受講者は2,000円とした。さらに、出張方式の場合は講師謝金が収入となる事例が存在した。支出項目としては、スタッフ交通費、パンフレット印刷費、資料印刷費、認定証発行費(カラー印刷+ラミネート加工)、会場費、茶菓子代、飲み物代といった費用が挙げられ、上述した収入から充当され、総合的に支出超過になることはなかった。

(5) 認定研修の拠点形成

カフェや美容室等のオーナーを本職とするプレイリーダーにより「休日時の店舗利用」の申し出を受け、費用および荷物の搬入・搬出等の運営負担が軽減される定期的な認定研修の拠点が複数形成された。店舗利用を提供した理由としては「地域密着型の経営を目指す立場であれば、本業ではない側面から店舗の認知促進につながることは魅力

的」と判断したことが挙げられた。

(6) プレイリーダーの支援体制

認定研修受講後の支援体制として、講師や他プレイリーダーに質問ができるコミュニティをWEB上で形成し、イベントカレンダーと補助スタッフの参加登録が可能なシステムを整備した。また、各プレイリーダーの活動記録として体験談を公開可能なサイト「コッコ防災⁶⁾」を整備し、プレイリーダーによる記事の投稿を受付、WEBの検索に対して有効なキーワードを踏まえた上で推敲し、同サイトで公開した。同サイトに掲載された記事のうち、100,000pvを超える記事も存在し、プレイリーダーの動機づけと認定研修の認知促進に寄与している。

(7) プレイリーダーの実践機会の創出

プレイリーダーの実践機会を創出するために、公式WEBサイトにワークショップ依頼フォームを設置し、様々な機関より出張講座を受け付ける体制を整備した。講座の開催実績を積み重ね、神奈川県横浜市港南区では、防災トランプワークショップが区の出前講座事業⁷⁾となり、実践機会の創出だけでなく、プレイリーダーに謝金・交通費が支払われる仕組みとして成立した。

3-1-3. 認定研修の実施内容

認定研修は約4時間半に渡り開催され、実施内容は主に「座学(50分)」「議論(60分)」「実践(160分)」の3部で構成される。実施内容の流れを表2に示す。各実施内容は図6に示した1冊のテキスト(52頁カラー印刷)にまとめ、認定研修開始前に受講者に配布している。

「座学①」では、参加者に対し、「自然災害に限らず身の回りに潜む様々な危険に対して状況を把握し、適切な行動を各々の判断で行うことから育むことが重要」であること、「防災をテーマにコミュニケーションを楽しく行える場づくりの1つの方法として防災トランプの遊びかたを習得し、自身や自身の所属する団体、イベント等における活動に防災トランプを取り入れる方法を学ぶこと」が目的であることを伝えている。また、「防災に関する知識を得ること」は主たる目的ではなく、「参加者の体験談や感じたことを意見として引き出すこと」に主眼を置いて認定研修を実施する主旨を伝えている。

表2 認定研修の実施内容

分類	実施内容	時間(分)
座学①	認定研修の主旨・目的の説明	1
座学②	認定研修の流れに関する説明	4
議論①	受講者の自己紹介及び活動紹介	10
議論②	認定研修に対する期待と学びの活用	20
座学③	防災トランプのひろがり	5
座学④	プレイリーダーの役割	5
座学⑤	ドキュメンタリー映像の視聴	15
座学⑥	開発の経緯と社会的な背景	5
座学⑦	場の実践による効果	5
座学⑧	支援ツールの活用方法	5
実践①	場づくりの基本手続きの確認 声のかけ方、意見の引き出し方	40
実践②	導入方法の実演と実践	120
議論③	フォローアップ制度	15
議論④	コミュニティの活用	15
座学⑨	総括と認定証の授与	5

「座学②」では、認定研修全体の流れを概観し、座学①で伝えた主旨と内容の結びつきについて補足しながら、「自身や自身の所属する団体、イベント等における活動にどのように防災トランプを用いた場づくりを取り入れることができるのか」を考えるよう呼びかけを実施している。

「議論①」では、認定研修に参加する参加者同士の氏名・所属・在住地域・職業や地域活動に関して紹介を実施している。「議論②」では、受講者の認定研修に対する動機づけを高めるために、各参加者の期待と活用イメージを共有している。講師の立場からは、参加者の活動について興味を示す質問および受講者の期待に寄り添う認定研修の説明を簡潔に行い、認定研修に対する受講者の動機づけを促す進行を軸に議論を実施している。

「座学③」では、「防災トランプにまつわる主な出来事」、「導入先事例」、「社会的評価」等の実績を伝え、議論②で提示された活用イメージとの結びつきの説明と実現性について補足している。

「座学④」では、プレイリーダーの役割として「トランプを楽しみながら、世代をこえてお互いの体験談や考えをシェアすることで学べる場づくり」を明示し、プレイリーダーに求められるニーズを簡潔に説明している。また、プレイリーダーの本業や興味のある分野から防災を語る役割を推奨し、一般的な知識だけでなく、専門家や独自の観点から防災に対する実情を伝え、学びの機会を創出していくことの意義について伝えている。

「座学⑤」では、ドキュメンタリー映像「笑顔のある防災訓練⁸⁾」の視聴を通じて、「防災トランプの遊び方」、「開発の想い」、「プレイリーダーの声」、「参加者の声」等を伝えている。

「座学⑥」では、防災トランプの開発の経緯として、「防災の意味」を概観し、「災害に強い人を育てること」を目的にした場づくりのツールとして防災トランプが位置づけられ、地域防災においては、「自分と家族に必要な防災訓練を考え実施すること」、「ご近所さん同士で助け合う関係を構築すること」を取り組むべき課題として位置づけ、その実現手段として「世代をこえて楽しく防災について話し



図6 配布テキストとプレイリーダー認定証



図7 拠点型認定研修の様子



図8 出張型認定研修の様子

合う場づくり」の実践に取り組んでいることを伝えている。

座学⑦では、「場の実践による効果」として、これまでの実践に関連する研究報告を参照し、「主体性の変化と学びの深まり⁹⁾」、「参加者の年代の多様性と学習効果の関係¹⁰⁾」、「中学生における防災を主題にした対話の学習効果¹¹⁾」、「防災教育の効果とその持続性^{11),12)}」、「教材開発が開発者に及ぼす影響¹³⁾」等の学習効果が報告されている。さらに、「防災トランプ横浜市港南区版¹⁴⁾」、「防災トランプ富士北麓地域版¹⁵⁾」、「防災トランプ長岡造形大学版¹³⁾」等の地域、施設の特性を取り入れたローカライズ版や他分野へ応用した事例として環境教育分野の「フェノロジートランプ」、福祉教育分野の「しゃごろく」等が開発されていることを伝えている。

座学⑧では、「支援ツールの活用方法」として、これまでのプレイリーダーによる実践に基づいて整理された実践方法の知識を紹介している。例えば、実施形式、話す長さ、ボーナス判定、話の出し方、意見に対する質問方法、プレイリーダーとしての心得、年齢別の言い換え方法、グルー

分けの方法、記録方法、事例紹介等が挙げられる。

実践①では、場づくりの基本事項を確認し、参加者に対する声のかけ方や意見の引き出し方の実践を各参加者に指導している。例えば、「自宅にいるときに強い揺れが起こった」の題目について参加者から意見を聞き出す質問として、「こういうときどうしますか?」といった回答者によっては答えづらい総合的な考えを問う聞き方ではなく、「今まで自宅にいるときに強い揺れを感じたことはありますか?」といった事実に対する「はい/いいえ」の二択で回答を促し、さらに、「いつ・どこで・なにをしているときに」といった状況を詳細化する質問、「その状況で、何か困ること、不安に感じることや危険に感じることはありましたか?」といった流れで段階を踏んで状況を詳細化し、回答を促すように質問をする流れを学習する実践を行っている。

実践②では、実際の場づくりを想定し、導入方法として場の参加者の協力を得ながら実演を実施する方法やグループワーク時によく出る質疑に対する応答・説明方法について実践を行っている。拠点型、出張型の各認定研修における実践中の様子を図7および図8に示す。

議論③では、開催日、開催場所、プログラムの決定、イベント広報、準備に必要な物品、会場準備、アンケートの実施、データ集計の各方法等のフォローアップ情報を伝え、ワークショップで使用している資料等が入手可能な専用WEBサイトを整備している。

議論④では、コミュニティの活用方法として、コツコツ防災の主旨を説明し、本業や興味・感心を軸にした情報発信のやりがいと重要性を伝え、プレイリーダー同士の情報共有機会の創出を図っている。

座学⑤では、場づくりに必要な情報や資料を確認・入手方法が記載された認定証(図6)を授与し、当日の学習内容と実習概要を振り返り、参加者の意見・発言を引用しながら総括し、今後の連絡方法や相談方法を伝えて認定研修を終了している。

3-2. インタビュー調査結果

3-2-1. 認定研修の受講動機

認定研修の受講動機および受講理由(複数回答)に関する回答結果のうち複数の回答が得られたものを表3に示す。受講動機として、複数回答が得られたものは23種類が挙げられ、受講者の受講動機は多様であったことが読み取れる。最も多く回答が得られた動機は、「所属団体の研修等に活用したいから(137名 57.3%)」であった。また、「子どもたちが飽きずに楽しめる防災学習を実施したいから(89名 37.2%)」、「講演会とワークショップに参加して興味を持ったから(73名 30.5%)」、「楽しく学びになる場づくりをしたいと思ったから(65名 27.2%)」、「自分の知識や考え方を再確認する良い機会になると思ったから(63名 26.4%)」、「ただ楽しいだけでなく学びの機会にもなるから(60名 25.1%)」、「防災の知識を得たり、意識を高めたりしていざというときに備えたいから(58名 24.3%)」、「イベントを開催する予定があり、そこで防災トランプを使いたいから(58名 24.3%)」は20%を越えており、主な受講理由として捉えられる。さらに「遊び方をきちんと学ばな

表3 認定研修の受講動機(複数回答 n=239)

受講動機・受講理由	回答数
所属団体の研修等に活用したいから	137
子どもたちが飽きずに楽しめる防災学習を実施したいから	89
講演会とワークショップに参加して興味を持ったから	73
楽しく学びになる場づくりをしたいと思ったから	65
自分の知識や考え方を再確認する良い機会になると思ったから	63
ただ楽しいだけでなく学びの機会にもなるから	60
防災の知識を得たり、意識を高めたりしていざというときに備えたいから	58
イベントを開催する予定があり、そこで防災トランプを使いたいから	58
遊び方をきちんと学びたいと考えたから	45
防災訓練に若い世代を巻き込みたいから	36
防災について正確な知識を学びたいと考えたから	33
友人・知人にすすめられたから	28
子育てに役立つ、信頼できる内容だと感じたから	21
店舗の定期イベントとして活用したいから	18
自分の活動で対話の機会を増やしたいから	14
家族のためになると感じたから	9
職員研修だったので業務として参加した	8
資格取得が好きなので	5
防災分野の活動実績を就職活動でPRしたいから	4
人助けをしたいから	4
今後必要になると考えたため	3
被災経験があるにも関わらず意識が風化したと感じたため 平時からできることをしたいと考えたから	2
震災時にボランティアに行けなかったため	2

いと考えたから(45名 18.8%)」、「防災訓練に若い世代を巻き込みたいから(36名 15.1%)」、「防災について正確な知識を学びたいと考えたから(33名 13.8%)」、「友人・知人にすすめられたから(28名 11.7%)」も10%を越えており、受講理由として挙げられ、受講者の共通する動機である可能性が示唆される。一方、「子育てに役立つ、信頼できる内容だと感じたから(21名 8.8%)」、「店舗の定期イベントに活用したいから(18名 7.5%)」、「自分の活動で対話の機会を増やしたいから(14名 5.9%)」、「家族のためになると感じたから(9名 3.8%)」、「職員研修だったので業務として参加した(8名 3.3%)」、「資格取得が好きなので(5名 2.1%)」、「防災分野の活動実績を就職活動でPRしたいから(4名 1.7%)」、「人助けをしたいから(4名 1.7%)」、「今後必要になると考えたため(3名 1.3%)」、「被災経験があるにも関わらず、意識が風化したと感じたため平時からできることをしたいと考えたから(2名 0.8%)」、「震災時にボランティアに行けなかったため(2名 0.8%)」といった回答については受講者の属性情報により個別に見られる動機である可能性が示唆されている。

3-2-2. プレイリーダーの活動状況

次にプレイリーダーによる活動実践事例及び活用事例を紹介する。

(1) 個人事業主による活動実践

個人事業主のプレイリーダーであるA氏は自身の活動に取り入れる前の実践機会として、申請者らが依頼を受けた埼玉県所沢市のN中学校の家庭学級における中学生の保護者を対象に防災トランプを用いた場づくりを実践した(図9)。事後にA氏は「初対面の参加者に楽しんでもらうことができた。自身の活動にも取り入れていきたい」と話し、その1ヶ月後にA氏の活動拠点となるカフェにおいて防災トランプを用いた取り組みの実践を開始している。



図9 個人事業主による活動実践

(2) 美容師による活動実践

美容師であるB氏は美容室で働く美容師のコミュニケーション研修として防災トランプを用いたワークショップに可能性を感じ、主に美容師間で対等に話し合うことを目的に場づくりを実践した(図10)。事後にB氏は「通常は売上を伸ばすための工夫や行動に関する反省について意見を求められる話し合いが多い中で、災害時に助け合える関係をいかにつくるかを話し合う機会となり有意義だった」と話し、その6ヶ月後に美容師だけでなく、防災を主題に地域住民との交流機会の創出を目的とした場づくりの実践を開始した(図11)。そのような取り組みから在籍している美容師の防災意識が高まり、顧客との話題だけでなく、非常時を想定した美容室の取り組みを開始し、防災マニュアルや企業継続計画の策定に至り、美容業界の専門誌に特集として掲載された¹⁸⁾。



図10 美容師による社内研修としての実践

(3) 歯科医師による活動実践

歯科医師であるC氏は地域貢献活動の一環として、休院中の歯科医院を開放して子育て世代の患者や地域住民を交えて防災トランプを用いた場づくりを実践した(図12)。C氏は「楽しみながら、子どもの視点から防災の話を開けることは親世代にとっても学びになる」と話し、参加者は「子どもはトランプゲームに夢中になりつつも、普段の様子を話してくれることが新鮮だった」と感想を話した。



図11 美容師による地域交流機会の創出

(4) カフェ経営者による活動実践

カフェ経営者であるD氏は地域住民と連携して防災コミュニティを形成し、その活動の一環として防災トランプを取り入れた場づくりを実践した(図13、図14)。D氏は「あらためて、地域防災への取り組みが大切だなと思ったとともに、話の引き出し方や進行の仕方などはやはり場数を踏んで自分なりに試行錯誤しないとスタイルができあがらないと思った。」と話し、その一方で参加者に楽しんでもらったことが契機となり、「地域の自治会長から防災トランプをやって欲しいと声をかけられ、地域と連携するきっかけが得られた」と話した。D氏はその後、地域に根ざした防災教育プログラムとして、導入部に防災トランプを利用し、DIG(図上訓練)やキャンプ等を組み合わせる学習内容の高度化を図る取り組みを展開している。



図12 歯科医師による子育て世代を対象にした活動実践

(5) 社会福祉協議会職員による活動実践

社会福祉協議会職員のE氏は地域の「傾聴ボランティア」と連携して小学校における防災授業の実践を行った(図15)。E氏は「教えるつもりで授業の準備をしたのに子どもたちがあんなに喋れることに驚きました。」と話し、参加した傾聴ボランティアのスタッフは「子どもが地域のみならずと仲良くしたいとメモに書いていて驚いた。こっちが何も教えたわけじゃないのに、気づいたことがすごいなと



図 13 カフェ経営者による地域住民と連携した活動実践①



図 15 社会福祉協議会による小学校の防災授業実践



図 14 カフェ経営者による地域住民と連携した活動実践②



図 16 町内会による若い世代を巻き込んだ活動実践

感心しました。」と場づくりを振り返っていた。事後、E氏の場づくりを契機として、他の小学校、自治体の職員研修、都道府県の職員研修と対象を拡大し、多くの参加者を動員し、交流の機会及びプレイリーダーの輩出に寄与した。

(6) 町内会防災担当者による活動実践

町内会長であり、防災担当も兼職していたF氏は地域防災訓練の「高齢化」を懸念し、「子どもが楽しく参加できる防災訓練」のメニューとして防災トランプの場づくりを実践した(図16)。実践中は他のプレイリーダーの助力を得ることで実施に至ったが、幅広い住民の参加を促した。F氏は「1人でも2人でも子どもとその親が防災訓練に参加してくれたことで、多くの住民が笑顔になった。この機会を継続していきたい。」と話した。

(7) 教員による活動実践

神奈川県相模原市において、防災教育実践校に指定された中学校の授業として防災トランプを全校的に活用することになり、同中学校の教員であるG氏はクラスの1つを担当することになり、実践に至った(図17)。G氏は「中学校においてトランプ遊びは普段禁止されているもの。ふざけないように、導入を念入りに準備したが、生徒が楽しそうに話している様子を見て、知識だけでなく、楽しく話すことも改めて大切だと感じた。」と話し、参加した生徒も「自分の話が他の人にとって学べる内容になると先生に教わって、もっと自信をもって意見しようと思えた。みんなで話せる順番があることが良かった。」と実践を振り返っていた。



図 17 教員による中学生を対象にした防災授業の実践

(8) 自治体職員による活動実践

自治体職員であるH氏は近隣市町村の自治体職員として務める同世代の職員間の交流機会を創出するために、防災トランプを用いた場づくりの実践に至った(図18)。H氏は「自治体職員として、住民とのコミュニケーションは構えてしまうことが多いが、こうした方法を知っておけば、楽しみながら意見を聞くこともできることがわかり、今後の活用機会の可能性を感じた。」と話し、公民館の事業に携わる職員に場づくりを推薦し、公民館の事業として防災トランプを活用した場づくりが実践される契機を創出した。

(9) 大学教員による GoogleStreetView を用いた実践

大学教員であるI氏は大学生・大学院生及び社会人を対象に防災トランプを活用した場づくりを実践し、対話の中で生じた具体的な話の風景を確認するために Google Street View を用いた実践に取り組んだ(図19)。I氏は「参

加者の具体的な体験談を聞きながら、類似する風景や場所を探すという行為自体が探索的な学習にもなり、他者から学ぶ意義がより一層あると感じた。」と話し、参加学生は「序盤は何を話してよいのか探り探りだったけど、懐かしい風景を見るうちに忘れていた体験談を次々に思い出して話し合いが盛り上がった。」と振り返っていた。

(10) 石巻青年会議所による被災地における活動実践

石巻青年会議所のメンバーであるJ氏は、子どもとその親世代を対象に震災の経験を踏まえた防災教育に取り組む場づくりの機会を創出するために実践を行った(図20)。J氏は「東日本大震災の教訓を踏まえ、石巻圏域では学校での防災教育に力をいれており、経験者の話を聞く、自分達で考えるなど、子どもの防災教育が充実している一方で、子どもの親世代に対して防災教育を進めるには課題も多く、働き手として活躍している世代の参加を促したい。」と話し、同青年会議所メンバーや石巻社会福祉協議会と連携し、大規模な場づくりの開催に至った¹⁹⁾。参加者全員にノベルティとして防災トランプを配布したことから、各参加者が家庭や職場で防災トランプを活用した場づくりを始めた。また、参加者より石巻版の防災トランプを開発したいとの声が高まり、現地住民の声を収集し、被災地である石巻の防災を語り継ぎ話し合うシンボルとしての開発可能性について議論が始まる契機を創出した。

(11) 留学生による活動実践

中国から日本に交換留学していた大学院生であるK氏は、日本語を約1年6ヶ月勉強していたが、考えを自由に話せる状況ではなく、「やさしい日本語を学ぶ」という趣旨から防災トランプを用いた実践に参加した。事後、K氏は「中国のトランプの遊び方は日本の遊び方と大きな差がなく、楽しみながら日本の防災事情や日常生活を深く話し、聞く契機となり、日本語の学習意欲が高まりました。また、私の拙い日本語で、中国では金属製のマンホールが盗まれ、大雨のときに踏み間違えて毎年死傷者が出ると話したら、感心したように話を聞いてくれて、さらに問題の対策をみんなで一緒に考えてくれました。」と話した。さらにK氏は、「交換留学を終えた後、中国に帰国し、母校の中国の日本語専攻の先生に防災トランプを見せたら、speakingの授業でロールプレイの代わりに使えるとコメントをもらい、日本人と中国人の両国の留学生が集う日本語コーナーで防災トランプを使って遊んでみました。結果は大成功でした。普段は話題を探すのに苦労しますが、防災トランプを楽しみながら、10代から60代まで様々な文化の異なる話を聞くことができました。」と振り返っていた。K氏はその後、一連の体験をWEBサイトで発信し、その内容は他留学生の場づくりの参加を促す機会の創出につながっている。

4. 考察：地域防災教育活動の継続性に影響を及ぼす要因

本研究では地域防災教育活動として継続的に取り組まれている「防災トランプ」を用いた場づくりにおいて、場づくりの担い手を認証する制度である「防災トランプのプレイリーダー認定制度」に着目し、その実態について詳細を



図18 自治体職員間の交流を目的とした活動実践



図19 大学教員による地図を活用した活動実践



図20 石巻青年会議所による被災地における活動実践

整理し報告した。前節に記した結果を踏まえて、本節では、地域防災教育活動の継続性に及ぼす影響を整理し、継続要因の仮説の提示を試みる。

第一に、プレイリーダー登録者数の推移及び活動実践のインタビュー結果に基づく、プレイリーダーが増加することで場づくりの実践事例も連鎖的に増え、認知が拡大し、社会的評価を受ける機会が得られる可能性が高まる。さらに、社会的評価を受けた場合、認知は一層拡大し、ワークショップの参加者および認定研修の受講希望者が増加することで、さらなる活動の拡大と継続性を促進する循環が生じることが考えられる。一方で、社会的評価を受けるまでの期間は、少人数を対象とした各プレイリーダーの実践機会の創出や活動を具体化する支援に取り組むことが重要であると考えられる。

第二に、プレイリーダーの受講動機に基づく、「所属団体の研修に活用」、「子どもたちが楽しめる防災学習の実施」、「楽しく学びになる場づくりの実現」、「イベントで防

災トランプを使いたい」といった内容が回答数の多い動機となっており、「問題を解決したい意図」よりも「新しい活動として取り入れたい意図」が受講動機として読み取れる。つまり、認定研修の受講候補者を確保する情報発信方法を検討するにあたり、「新しい活動としての認知」と「取り入れたい（取り入れることが可能な）活動としての認知」の2点が考慮すべき重要な点と考えられる。本研究における具体的な有効策としては、プレイリーダーによる実践内容をモデルケースとして情報発信することが考えられる。

第三に、プレイリーダーが継続的に実践に取り組む動機につながる感想の内容として、「自分にはない体験談や考えを聞くことができた」、「自分の話を聞いてくれた」といった対話を通じた気づきが得られること、また、「対話が成立することの重要性」、「忘れていた記憶を思い出す機会」、「今後の活用可能性」といった新しい発見につながることで、さらに、「ローカライズ版の開発」、「新たな実践の場の創出」、「新たな主体との連携」、「新たな事業の創出」、「新たな取り組みの契機」といった具体的な次の行動につながるものが挙げられた。上記、「対話を通じた気づきが得られること」、「新しい発見につながることで」、「具体的な次の行動につながることで」は場づくりの実践においても実践の効果として意識すべき目標であり実践の継続性に影響を及ぼす可能性が示唆される。

以上より、地域防災教育活動が継続する要因として、

- ・少人数を対象とした各プレイリーダーの実践機会の創出や活動を具体化する支援に取り組むこと
- ・取り組みに対し社会的評価を受けること
- ・「新しい活動としての認知」と「取り入れたい（取り入れることが可能な）活動としての認知」の2点を踏まえた情報を発信すること
- ・対話を通じて気づきを得られる場であること
- ・新しい発見につながる機会を得られる場であること
- ・具体的な行動につながる機会を得られる場であることが本研究の成果に基づく仮説として提示される。

今後の課題としては、他事例を整理した上で、上記仮説を検証することが挙げられる。

5. 参考文献

- 1) 福本壘, 中村和彦 (2019), 「対話型学習教材『防災トランプ』を用いた中学校における防災授業の実施とその評価」, 安全教育学研究: 18 (1), 51-67.
- 2) 防災トランプ公式サイト <https://bousai-trump.jp> (2019/09/26 最終アクセス)
- 3) 福本壘 (2016), 「『防災トランプ』で災害時に助け合える絆を結ぶ」(インタビュー記事)『地域人』, 第15号, 大正大学出版会, 114-115.
- 4) 福本壘 (2017), 「トランプで自助・共助を楽しく促す」(インタビュー記事)『防災ガイド 2017年版』株式会社日本ビジネス出版, 38-39.
- 5) 神奈川わかものシンクタンク 公式サイト <https://futakoburakuda.org> (2019/09/26 最終アクセス)
- 6) コツコツ防災 <https://bousai-story.jp/> (2019/09/26 最終アクセス)
- 7) 横浜市港南区「防災トランプ出前講座」 https://www.city.yokohama.lg.jp/konan/kurashi/bosai_bohan/saigai/lectures.html (2019/09/26 最終アクセス)

- 8) 笑顔のある防災訓練 (映像資料) <https://www.youtube.com/watch?v=hTzuWBV5R1M> (2019/09/26 最終アクセス・視聴)
- 9) 福本壘, 中村和彦, 山口紀生 (2018), 「防災を主題にした対話を通じた学習者の主体性の変化と学びの深まりー防災トランプを活用した事例を通じてー」, 環境教育: 27 (3), 15-22.
- 10) 福本壘 (2018), 「対話による地域防災訓練の試行ー横浜市港南区・戸塚区における防災トランプの活用事例を通じてー」, 自治体危機管理研究: 21 (1), 69-88.
- 11) 福本壘, 岡野将利, 諏訪拓人 (2018), 「ゲーミングと対話による防災教育の効果とその持続性に関する研究」, 『日本安全教育学会第19回横浜大会予稿集』C-2, p59-60, 横浜.
- 12) 福本壘, 諏訪拓人, 岡野将利, 江目親利, 山口玲子, 佐藤健 (2019), 「ゲーミングと対話による防災教育の効果とその持続性に関する研究ー横浜市港南区岸が谷小学校における15ヶ月間の継続調査を事例としてー」, 『日本安全教育学会第20回山形大会予稿集』p88-89, 山形.
- 13) 福本壘 (2019), 「防災を主題にした対話を促す教材開発のプロセスデザインー学生による防災トランプ長岡造形大学版の開発実践を事例としてー」, 長岡造形大学研究紀要: (16), 86-91.
- 14) CAMPFIRE「世代をこえて防災を楽しく話し合う場づくり. 横浜版・防災トランプをつくる!」 <https://camp-fire.jp/projects/view/8902> (2019/09/26 最終アクセス)
- 15) 毎日新聞「富士河口湖高校 1年生『観光とおもてなし』, 県に振興策を提案 富士山クッキーや多国語パンフ, 防災トランプ」, 2016年2月5日地方版掲載 <https://mainichi.jp/articles/20160205/ddl/k19/100/043000c> (2019/09/26 最終アクセス)
- 16) 神奈川わかものシンクタンク「フェノロジートランプ」 https://futakoburakuda.org/phenology_prj/ (2019/09/26 最終アクセス)
- 17) 神奈川わかものシンクタンク「しゃごろく」 https://futakoburakuda.org/syagoroku_prj/ (2019/09/26 最終アクセス)
- 18) 月刊 HAIRMODE 美容師のための防災BOOK, 2019年7月1日掲載, 76-83.
- 19) 石巻日々新聞「ゲームで育む自助共助 石巻青年会議所防災トランプWS 楽しみながら意識づけ」2017年9月12日掲載.